

桜美林論考

The Journal of J. F. Oberlin University

人文研究

Studies in Humanities

2019 年 3 月

March 2019

桜美林大学 人文学系／芸術・文化学系

J. F. Oberlin University Division of Humanities / Arts and Culture

# 忘れえぬ演劇研究者

— 飯塚友一郎 —

法 月 敏 彦

キーワード：演劇学、室内劇、『歌舞伎細見』、『世界演劇史』、『演劇学序説』

## はしがき

わが国では、明治期以降、多数の演劇研究者が豊かな研究成果を残した。今日の私たちはその恩恵を蒙りつつ自らの研究を進めている。どのような演劇研究者が存在し、またどんな研究成果が残されているのか。現状では著名な演劇研究者すべての伝記が残されている訳ではなく、その研究成果も正確に把握されていない。

本稿では、近代における日本演劇研究の名著『歌舞伎細見』、最も広範な内容の『演劇学序説』の著者である飯塚友一郎を取り上げ、披見することができた書誌情報の整理を柱として、その研究成果を概観する。

## 1. 飯塚友一郎という演劇研究者

飯塚友一郎（1894～1983）に関する記述のなかで最も充実していると筆者が考えるのは、半世紀以上前の『演劇百科大事典』第1巻（平凡社1960）の項目である。

いいずかともいころお 飯塚友一郎（1894～ ）演劇研究者。明治27年、東京に生れて、東京大学法学部を卒業した。学生時代に『歌舞伎細見』を書いたほど早くから歌舞伎を分析的に研究していたが、卒業後弁護士を開業した。その後演劇研究に専念し、長く日本大学芸術学部教授をつとめ、現在二松学舎大学教授。『演劇学序説』『演劇入門』などのほか主著に『歌舞伎概論』『歌舞伎細見』がある。前者は歌舞伎全般にわたって学問的検討を試み、その本質を解明したもので、歌舞伎を国劇進化の一過程におくことによって、江戸文化・俳優・戯曲・演出様式その他を根底的に分析研究し、歌舞伎とは何かを鋭く追求している。後者は複雑多岐な歌舞伎狂言を専門的な立場から細かく整理分類し、解説をほどこしたものである。

（大木 豊）

これは飯塚友一郎在世時（65 歳頃）の記述である。著者の大木豊（1925～1976）は演劇評論家。要を得た記述である。なお、処女作の書名は『歌舞伎狂言細見』であるが、詳しくは後述する。さらに詳しい記述を探したところ、下記の自筆略年譜をみつけることができた。飯塚友一郎著の『随筆 腰越帖』巻末に付録として掲載されているもので、同書出版時の昭和 12 年（1937）までしか記されていないが、他には見られない記述が多数含まれているため自著略年譜を中心に、筆者が補記した事項には＊印を付けて作成した。（ ）内に西暦と満年齢を付記した。年譜に著者自身が記した記号の△は私事、●は著作、○は公事である。

### 【自著略年譜／補記】

明治 27 年（1894, 0 歳） △11 月 11 日東京神田須田町に生る。

＊牛込横寺町の素封家、井伏鱒二や稲垣足穂など文豪の記述に登場する飯塚酒場の長男である。

明治 45 年（1912, 18 歳） △4 月、成城中学校卒業。

＊その後、第一高等学校、東京帝国大学法学部に進学した。

大正 8 年（1919, 25 歳） △7 月、東京帝国大学法学部卒業。

＊卒業を間近に控えたこの年 1 月 5 日、隣家芸術倶楽部の物置で松井須磨子（1886～1919）が縊死。その踏台を蹴った「ガターン」という音を実家である飯塚酒場奥の離れに起居していた帝大生の飯塚友一郎が聞いた。そして須磨子が坪内逍遙に宛てた「遺言状」を余丁町で逍遙の養女く（後の飯塚く）に受け取ったという。「何の気なしに臨終の物音を最初に耳にした男と、何の気なしに遺言状を最初に手にした女とが、こうして一緒になつてゐるのも不思議な因縁である。」<sup>①</sup>

●9 月「歌舞伎狂言細見」（歌舞伎新報社）上梓。

＊これ以降、母校である牛込の成城中学校と世田谷の成城学園に関わり<sup>②</sup>、「理事」<sup>③</sup>も勤めたという。澤柳政太郎校長に呼ばれて広島から 1919 年に上京した鰺坂國芳（小原國芳。1887～1977）と牛込で出会っている。

○歌舞伎新報編輯執筆。

大正 9 年（1920, 26 歳） △1 月、弁護士登録開業。

△6 月結婚、牛込若松町に新居。

＊6 月 30 日、飯田橋大神宮にて、坪内く（1899～1994）と挙式。仲人は新婦の母校成女女学校校長宮田脩（1874～1937）夫妻であった。帝国ホテルで披露宴を行った<sup>④</sup>。

＊この頃から「室内劇」と称する素人演劇を若松町の新居<sup>⑤</sup>で上演。

＊大正 10 年（1921）27 歳、長男五郎蔵（1921～1994）。横浜国立大学教授。専門は建築構造学）誕生。

大正 11 年（1922, 28 歳） △隆文館株式会社（出版）取締役。

△相互金庫理事。

\*長女やなぎ<sup>6</sup>誕生。舅である坪内逍遙が『家庭用児童劇』を上梓。

大正 12 年（1923, 29 歳） ● 6 月、「室内劇の理論と実際」（隆文館）上梓。

大正 13 年（1924, 30 歳） △東京府会議員（牛込区選出）に当選。

大正 15 年（1925, 32 歳） ● 10 月、「歌舞伎細見」（第一書房）上梓。

昭和 2 年（1927, 33 歳） ● 12 月、「農村劇場」（大鐙閣）上梓。

昭和 3 年（1928, 34 歳） △府議任期満了。弁護士廃業、学究生活に没頭す。

● 9 月、「歌舞伎概論」（博文館）上梓。

○新潮社「日本文学大辞典」執筆。

昭和 4 年（1929, 35 歳） △ 6 月、腰越山荘に移転。

\*大正末期から夏の別荘として使用していた鎌倉の腰越に移転。

● 4 月、「公共小劇場」（博文館）上梓。

昭和 5 年（1930, 36 歳） ● 9 月、「演劇と犯罪」（近代犯罪科学全集）上梓。

● 12 月、「世界演劇史」第一巻古代篇（平凡社）上梓。

昭和 6 年（1931, 37 歳） ● 1 月、「世界演劇史」第二巻中世篇（平凡社）上梓。

● 3 月、「世界演劇史」第三巻シェークスピア時代篇（平凡社）上梓。

△ 4 月、同志と共に演劇学会創立。

\*この演劇学会は、現在の日本演劇学会（1949 年創立）とは別の団体であり、いわば第一次日本演劇学会である。季刊の『演劇学』を 1932 年 5 月から 36 年 9 月まで刊行した。「同志」とは、新関良三（1889～1979）、野上豊一郎（1883～1950）、河竹繁俊（1889～1967）、舟橋聖一（1904～1976）、高野辰之（1876～1947）、飯塚友一郎（1894～1983）、守随憲治（1899～1983）、田辺尚雄（1883～1984）であった。

● 5 月、「世界演劇史」第四巻モリエール時代篇（平凡社）上梓。

● 9 月、「世界演劇史」第五巻十八世紀名優篇（平凡社）上梓。

昭和 7 年（1932, 38 歳） △ 4 月、日本大学芸術科講師嘱託。

\*この頃より日本大学法文学部美学科（後の芸術学部）に勤務し 1945 年頃まで教授。

\*なお、正確な時期は未詳ながら、法文学部美学科学監で芸術学部（日芸）を創立した哲学者松原寛（1892～1957）と大正 10 年（1921）以降、繋がりをもっていたと考えられる。それは、母校成城中学校の構内に私立成城小学校を創設した澤柳政太郎（1865～1927）、澤柳のブレーンであった京都帝国大学の教え子長田新（1887～1961）、長田の働きかけで広島高等師範学校付属小学校から私立成城小学校に赴任した学校劇命名者で玉川学園創立者の鰐坂國芳（小原國芳 1887～1977）、鰐坂の京都帝国大学の親友松原寛という人間関係が想定できるためである。

\*母逝去。

● 4 月、「世界演劇史」第六巻古典主義と浪漫主義篇（平凡社）上梓。

- 平凡社「百科大事典」編纂執筆。
- 演劇博物館編「国劇要覧」編纂執筆。
- 「演劇学」(演劇学会編)編輯執筆。
- 昭和8年(1933, 39歳) ○平凡社「百科大事典」執筆。
- 昭和9年(1934, 40歳) ○平凡社「大辞典」執筆。
- 昭和10年(1935, 41歳) △11月、日本大学文学部教授に任ず。
- \* 舅坪内逍遙逝去。
- △12月、日本新劇倶楽部幹事長。
- 「日本大学芸術科講座」(日本大学出版部)編纂。
- 平凡社「大辞典」執筆。
- 中央公論社「世界文芸大辞典」執筆。
- 9月、「演劇概論」(日本大学芸術科講座)上梓。
- 11月、「日本演劇史」(同上)上梓。
- 昭和11年(1936, 42歳) ●2月、「演劇研究の方法」(岡倉書房)上梓。
- 昭和12年(1937, 43歳) ●1月、「歌舞伎の本質」(日本大学芸術科講座)
- 1月、「新劇と旧劇」(岡倉書房)上梓。
- △4月、腰越町会議員に当選。
- 5月、「歌舞伎問答」(日本文化叢書)上梓。
- 10月、「随筆腰越帖」(書物展望社)上梓。
- 平凡社「新撰大人名辞典」執筆。
- \* 昭和14年(1939)45歳の時、日本大学法文学部芸術学科(文芸学、演劇美学、映画美学、美術史、音楽美学各専攻)、同芸術科(創作、演劇、映画、美術、音楽各専攻)が板橋区江古田(現在の江古田校舎)に移転。
- \* 昭和15年(1940)頃、鎌倉文化協会(後に発展して鎌倉アカデミア)創設。
- \* 昭和20年(1945)頃、日本大学法文学部芸術学科・同芸術科教授を退任。
- \* 昭和21年(1946)5月、52歳の時、鎌倉アカデミア創立(1950年9月廃校)。初代校長に就任<sup>⑦</sup>。
- \* 昭和24年(1949)55歳の時、6月、東京の日本演劇学会が創設され、事務所を早稲田大学演劇博物館内に設置。
- \* 昭和26年(1951)頃、東京文科大学(現二松学舎大学)教授。成城学園理事。
- \* 昭和40年(1965)3月29日、71歳の時、日本大学より文学博士の学位授与。
- \* 昭和58年(1983)4月21日、逝去。享年88歳。

以下、実際の著書や諸著の記述を基に飯塚友一郎の人生を、第一段階(1919～1934)、第二段階(1935～1945)、第三段階(1946～1974)の3期に分けて述べる。なお、基本的には著書の「刊記」「発行所」「頁数」「序文の署名」などの書誌情報を詳し

く記し、「内容」「付記」で追加情報と筆者の見解を述べるという形式で論述した。

## 2. 第一段階 (1919 ~ 1934)

### 『歌舞伎狂言細見』

- ・ 刊記：大正 8 年 9 月 20 日初版。大正 9 年 8 月 20 日再版。大正 11 年 5 月 10 日三版。
- ・ 発行所：忠誠堂
- ・ 頁数：目次 65 頁、本文 882 頁、索引 24 頁。
- ・ 序文：伊原青々園「序文」（「大正八年八月十四日 青山長者丸にて」）、河竹繁俊「『歌舞伎狂言細見』の発行に際して」（「大正八年八月」）。「緒言」（「大正八年八月 牛込横寺町にて 著者識」）、「再版の序」（「大正九年盛夏 牛込若松町の新居にて 飯塚友一郎識す」）、「第三版の序」（「大正十一年若葉の五月 牛込にて 著者申す」）。なお、伊原青々園と河竹繁俊の序文は、増補改訂新版である『歌舞伎細見』にはない。
- ・ 内容：同書の緒言によれば「細見とは概論に対する各論とでもいふ意味で、将来著者が発表すべき『歌舞伎狂言概論』と一心同体をなすものであります。」という位置付けであり、東京帝国大学法学部在学中の著作である（横山正博<sup>⑧</sup>「独得な世界」<sup>ユニーク</sup>『家庭劇の理論と実際』所収）。四百数十項に及ぶ歌舞伎狂言すなわち演目をいろは順に配列して、基本的には、それぞれの演目について典拠や由来、現代に至る作品の展開、参考書を整理した著作である。いわば、歌舞伎狂言作者の間に伝承された『世界綱目』<sup>⑨</sup>という基本的類型の一覧に詳細な解説を加えて増補した著作である。
- ・ 付記：後年、飯塚友一郎は自著を批判して「いたづらに孫引の資料で捏上げたダレッタンチズムの産物が私の処女著作の『歌舞伎細見』である。」<sup>⑩</sup>と言っているが、これは 7 年後の改訂増補版である『歌舞伎細見』を含めた著者の自己批判である。

### 『室内劇の理論と実際』

- ・ 刊記：大正 12 年 6 月 10 日
- ・ 発行所：隆文社
- ・ 頁数：目次 9 頁、本文 169 頁（跋、付録を含む）。舞台写真 15 点、装置写真 3 点。
- ・ 序文：「序文」（「大正十二年春三月 牛込若松町にて 著者」）
- ・ 内容：序文には芸術と社会の関わりが述べられており、大正 9 年以来、室内劇という名称を創始して行った 3 年間の活動を総括している。本文では、「一 何の為に劇を演ずるか」「二 演劇は生活の要素である」「三 劇場の合理的組織」「四 新劇運動の種々相」「五 小劇場運動」「六 「室内劇」を提唱する理由」「七 室内劇の実際」という論述に続いて、跋文として「一つの杞憂 中川敏夫」「独得な世界 横山正博」「室内劇の欠点とその救済 繁岡鑒一<sup>⑪</sup>」が述べられ、さらに付録として「我が国の劇場政策」という『週刊朝日』大正 11 年 12 月号の記事が再録されている。

室内劇として武者小路実篤「その妹」、舞踊劇「藤娘」、谷崎潤一郎「愛すればこそ」、谷崎潤一郎「彼女の夫」、ストロ原作「扉は開放して」、ホートン原作「寡婦」、有島武郎「死と其前後」、谷崎潤一郎「愛なき人々」を上演した。

『歌舞伎狂言細見』の著者が全く畑の異なる現代劇の研究に足を踏み入れた最初の著書であるが、一方で本書には後年の歌舞伎を除く演劇研究に関わるすべての萌芽が含まれている。

- ・ 付記：飯塚友一郎命名の「室内劇」という名称には、後年の修正があり、アメリカの演劇雑誌に散見される用例からホームシアターつまり家庭劇場<sup>⑫</sup>と言い換えている。また、くに夫人から見た室内劇の実態、かなり手厳しい文句<sup>⑬</sup>が知られている。室内劇を実際に観た人物として小原國芳もおり<sup>⑭</sup>、「学校劇研究会」の生れる為には、(中略)素人では最近熱心にやつて下さる飯塚友一郎氏が、喜んで賛同して下さったことを心から嬉しく思います。」<sup>⑮</sup>という。

### 『歌舞伎細見』

- ・ 刊記：大正 15 年 10 月 17 日。縮刷版、昭和 2 年。
- ・ 発行所：第一書房
- ・ 頁数：目次 53 頁、本文 1084 頁、索引 105 頁。
- ・ 序文：「緒言」（「大正十五年晩夏 相州腰越の別荘にて 飯塚友一郎識」）
- ・ 内容：旧著『歌舞伎狂言細見』に訂正と増補を施し、演目の単なるいろは順ではなく、歌舞伎狂言の内容に応じた分類を行った著作である。その分類は、「第一編 稗史野乗編」「第二編 仇討狂言編」「第三編 御家騒動編」「第四編 縁起霊験編」「第五編 怨霊変化編」「第六編 名人奇人編」「第七編 義人侠客編」「第八編 白浪毒婦編」「第九編 心中情話編」「第十編 喜劇編」「第十一編 浮世風俗編」となっており、目次によるおおまかな検索が可能となった。緒言によれば、この分類法は「現実的であつて理想的ではない。」という。その意味は、例えば役者本位の分類法を採用すれば更に歌舞伎の本質に触れることができるであろうが、それは「到底不可能である」という。

旧著と同様、それぞれの演目について典拠や由来、現代に至る作品の展開、参考書が整理されているが、細目数と挿入された錦絵数などが大幅に増加している。例えば『仮名手本忠臣蔵』の項目を例にとると、旧版の細目数は 8 項で錦絵 1 点だが、改訂増補版の本書の項目「忠臣蔵」は、細目数 74 項で錦絵 11 点である。

- ・ 付記：本書は、後年の再版企画に際して五十音順索引に改める話があったという。その経緯について河竹登志夫（1924～2013）が思い出を綴っている<sup>⑯</sup>。なお、『日本大百科全書（ニッポニカ）』には「こうした系統的かつ網羅的な作品概観の書はいまもほかに類書がなく、歌舞伎研究のために重要な業績として価値が高い。[服部幸雄]」という評価がある。



### 『農村劇場』

- ・刊記：昭和2年12月25日
- ・発行所：大鑑閣
- ・頁数：目次4頁、本文353頁
- ・序文：「はしがき」（「昭和二年秋十月 牛込若松町にて 飯塚友一郎」）
- ・内容：全8章からなる。「第一章 農村劇場の出発点」「第二章 演劇の社会的効用」「第三章 農村文化の覚醒」「第四章 我が農村娯楽を顧る」「第五章 我が農村演劇の沿革」「第六章 我が農村に於ける新劇運動」「第七章 農村劇場の理想的形態」「第八章 結論としての演劇の社会化」という構成である。

本書は、現代でいうところの「地域演劇」に関する先駆的著書という位置づけが適切であろう。また、本書は同年2月春陽堂刊行の中村星湖著『農民劇場入門』から「種々の示唆を受けたことを附記して、同氏に敬意を表」するものであるという。さらに本書は終戦後、20年という激動の歳月を経て『農村と演劇』（別項参照）へと展開していった。

### 『歌舞伎概論』

- ・刊記：昭和3年9月1日
- ・発行所：博文館
- ・頁数：目次15頁、本文669頁、索引39頁。挿絵48図。
- ・序文：「緒言」（「昭和三年盛夏 相州腰越に避暑して 著者識」）
- ・内容：歌舞伎に関する前著、大正8年刊『歌舞伎狂言細見』および大正15年刊『歌舞伎細見』という「各論」と対をなす概論であり、全7章で「歌舞伎とは何ぞや」を究明した大著であり、「現在の歌舞伎の清算書」であるという。また本書は、演劇研究の前提としての「歌舞伎に対する正しき認識」という出発点であり、それは演劇学を築き上げるための土台であるという。「序論 歌舞伎の見方」「第一章 歌舞伎の根柢としての江戸文化諸相」「第二章 国劇流域に於ける歌舞伎の展開」「第三章 歌舞伎役者と其生活」「第四章 歌舞伎狂言と其の作者」「第五章 歌舞伎劇場と其の観衆」「第六章 歌舞伎の様式と其の演出法」「第七章 歌舞伎の舞台装置と其の粉装法」「第八章 歌舞伎の劇場音楽」という詳述をへて「結論 歌舞伎の将来」に提出されたのは、「演劇隆盛の社会状態の到来と天才の出現とによって、渾然たる新国劇形態の結晶をみるであらう。それこそ、歌舞伎によつて歌舞伎を征服した結果に外ならない。」という。いわば舅坪内逍遙の『新楽劇論』<sup>⑦</sup>などをさらに推し進めたものである。

### 『公共小劇場其の方法 主として農村劇・学校劇其の他の素人演劇の為に』

- ・刊記：昭和4年4月28日
- ・発行所：博文館（演劇研究叢書 第二編）
- ・頁数：はしがき・目次・訳者序言21頁、本文449頁。



- ・ 序文：「はしがき」（「昭和二年冬二月 牛込若松町にて 飯塚友一郎」）
- ・ 内容：Dean, A ; Little Theatre Organisation and Management for Community, University and School. 1926 アレックス・ディーン『共同社会、大学及諸学校の為の 小劇場の組織と経営』の全訳であり、翻訳に際して「文学士高橋義雄<sup>®</sup>君のお手伝を煩すところ 尠からず」であったという。原著本文は全 17 章で、アメリカにおける素人演劇の実局面が記されている。訳者序言として「小劇場運動の新局面と其の戦術」という「註解的私見」が添えられている。

### 『演劇と犯罪』

- ・ 刊記：昭和 5 年 9 月 10 日
- ・ 発行所：武俠社（近代犯罪科学全集 第十五篇）
- ・ 頁数：目次 6 頁、本文 407 頁。
- ・ 序文：なし。大扉裏面に「○世界はすべて劇場なり。男も女も皆其処に踊る役者に外ならず。（シェークスピア） ○人は皆既に罪を犯したれば、神より栄光を受くるに足らず。（羅馬書第三章）」の引用が記されている。
- ・ 内容：全 7 章の書き下ろしである。「第一章 演劇と犯罪との交渉如何」「第二章 世界は凡て一大劇場なり」「第三章 人は皆、罪の子なり」「第四章 演劇性犯罪」「第五章 演劇性犯罪（続）」「第六章 演劇の悪性とその取締」「第七章 演劇に現れた犯罪」であり、その事例は、日本の古典劇を含む世界中から採られている。

本書は、一見、法律家としての飯塚友一郎の面目を保つものと看做されるかもしれない。それは本書 p.18「五 本稿の執筆に就て」に「学的関心は、演劇及び劇場に関する法制を古今に亘つて蒐集する事によつて、その方面から国家の演劇政策の推移、及び演劇の社会的影響などを考究せんとするにあつた。」という言葉で明らかである。しかしながら筆者は、法律家としての真の面目を、『歌舞伎狂言細見』から後の『演劇学序説』に至るまで貫かれている形式、すなわち演劇の事象や論考の要点を法律の条文のように整然と配列する記述形式そのものにあると考えている<sup>®</sup>。

### 『世界演劇史』

- ・ 刊記：第 1 巻、昭和 5 年 12 月 12 日。第 2 巻、昭和 6 年 1 月 23 日。第 3 巻、昭和 6 年 3 月 20 日。第 4 巻、昭和 6 年 5 月 30 日。第 5 巻、昭和 6 年 9 月 20 日。第 6 巻、昭和 7 年 4 月 20 日。
- ・ 発行所：平凡社
- ・ 頁数：第 1 巻 古代篇、目次 10 頁、本文 328 頁、挿絵 72 図。第 2 巻 中世期篇・文芸復興期篇、目次 11 頁、本文 481 頁、挿絵 46 図。第 3 巻 シェークスピア時代篇 目次 7 頁、本文 304 頁、挿絵 47 図。第 4 巻 モリエール時代篇、目次 9 頁、本文 334 頁、挿絵 43 図。第 5 巻 十八世紀の名優篇、目次 17 頁、本文 531 頁、挿絵 48 図。第 6 巻

擬古典主義と浪漫主義、目次 14 頁、本文 464 頁、挿絵 48 図。索引 90 頁。

- ・ 序文：第 1 巻「訳者はしがき」（「昭和五年十一月 相州腰越にて 訳者しるす」）。第 2 巻「訳者はしがき」（「昭和六年新春 訳者記す」）。第 3 巻「訳者はしがき」（「昭和六年二月 残雪消えやらぬ日 湘南腰越の山荘にて 飯塚友一郎識」）。第 4 巻「訳者はしがき」（「昭和六年五月 山躑躅の花盛なる山荘にて 訳者記」）。第 5 巻「訳者はしがき」（「<sup>(ママ)</sup>昭和六年九月、秋雨の白萩にそゝぐ日 飯塚友一郎記」）。第 6 巻「訳者はしがき」（「昭和七年三月、亡母の柩を送りて 訳者記」）。
- ・ 内容：デンマークの俳優・演劇学者カール・マンツィウス Karl Mantzuis (1860～1921) の原著（第 1 巻 1897～第 6 巻 1916 頃）を、ルイズ・フォン・コッセル Louise von Cossel が英訳した A History of Theatrical Art からの重訳。「訳者はしがき」によれば、「我々には日本や支那に関する粗が直ぐに眼に立つ（中略）第十九世紀以降の新劇運動に関する記述を欠いていることであるが、（中略）広く世界の演劇現象を著者独自の感覚をもつて、如実に伝へている点に於て、私は名著であると言ふに躊躇しない。」と述べ、その価値を認めている。
- ・ 付記：英訳原著にウィリアム・アーチャー William Archer (1856～1924) の「序文」（1903 年）が記されており、本書第 3 巻は、マンツィウスがコペンハーゲン大学に提出した哲学博士の学位論文『シェークスピア時代の英国演劇史』であるという。第 6 巻の巻頭には「原著者の序」が記されている。

### 3. 第二段階（1935～1945）

昭和 10 年（1935）4 月～12 年（1937）1 月、日本大学出版部刊「日本大学芸術科講座」のうち「日本演劇史（上）」「演劇概論」「日本演劇史（下）」「歌舞伎の本質」を上梓。本講座出版の背景には、日本大学文学部文学科美学専攻から芸術科として独立し、それを文部省に認めてもらうという大きな目論見があったと考えられる<sup>20</sup>。

「日本演劇史（上）」講座第 1 回 3 冊目

- ・ 刊記：昭和 10 年 4 月 30 日
- ・ 発行所：日本大学出版部
- ・ 頁数：本文 64 頁、挿絵なし。
- ・ 序文：なし
- ・ 内容：上巻として「第一講 序説」「第二講 上代国劇の源流」「第三講 外来の楽舞」「第四講 中世雑劇の諸相」「第五講 能の大成」までを講じている。

「演劇概論」講座第 4 回 2 冊目

- ・ 刊記：昭和 10 年 9 月 8 日

- ・発行所：日本大学出版部
- ・頁数：本文 114 頁、挿絵なし。
- ・序文：なし
- ・内容：「第一講 演劇現象の見方」「第二講 演劇の研究方法」「第三講 演劇発生論」「第四講 演劇進化論」「第五講 演劇構成論」「第六講 劇場機能論」「第七講 演劇的表現」「第八講 演劇形態論」「第九講 演劇作法論」「第十講 演劇政策論」という内容であり、後の『演劇学序説』を彷彿とさせる講座内容である。

#### 「日本演劇史（下）」講座第 6 回 3 冊目

- ・刊記：昭和 10 年 11 月 25 日
- ・発行所：日本大学出版部
- ・頁数：本文 64 頁、挿絵なし。
- ・序文：なし
- ・内容：上巻に続けて近世演劇から近代の新劇までを講じている。「第六講 人形浄瑠璃」「第七講 歌舞伎初期」「第八講 歌舞伎中期」「第九講 歌舞伎末期」「第十講 新演劇の勃興」

#### 「歌舞伎の本質」講座第 10 回 1 冊目

- ・刊記：昭和 12 年 1 月 18 日
- ・発行所：日本大学出版部
- ・頁数：本文 61 頁、挿絵なし。
- ・序文：なし
- ・内容：「第一講 方法論の見地から」「第二講 観衆論の見地から」「第三講 劇場論の見地から」「第四講 俳優論の見地から」「第五講 戯曲論の見地から」「第六講 演出論の見地から」であり、『歌舞伎概論』を要約した内容である。

#### 『演劇研究の方法』

- ・刊記：昭和 11 年 2 月 21 日
- ・発行所：岡倉書房
- ・頁数：目次 3 頁、本文 369 頁、挿絵なし。
- ・序文：「はしがき」（「昭和十一年二月雪晴れの朝 腰越の山荘にて 飯塚友一郎識」）
- ・内容：はしがきによれば、「此の十年ほどの中に発表した研究の草稿中から、特に演劇研究の課題と方法とに関するものを選んで編纂したものである。」という。また、本書の目的としては「私の辿ってきた足跡を一応は整理し、私の辿り着いた演劇観を語らせて頂きたい」と述べている。構成は「第一編 演劇研究への道」「第二編 劇場史の課題」「第三編 演劇論叢」「第四編 演劇政策論」となっている。

本書以降、所謂戦前・戦中には、それ以前の著述に比べて内容的に変化が認められる。それこそが戦争の影響であろう。

### 『新劇と旧劇』

- ・刊記：昭和 12 年 1 月 30 日
- ・発行所：岡倉書房
- ・頁数：目次 9 頁、本文 279 頁、挿絵なし。付録 2 頁。
- ・序文：「はしがき」（「昭和十二年一月冬日を浴びつゝ腰越の山荘にて 著者識」）
- ・内容：はしがきに「昨年上梓した『演劇研究の方法』の、謂はば姉妹編である。この数年間に発表した論稿のうちで前著に洩れたものを、やはり講義形式で編纂したものである。」と記されている。

構成は、「第一篇 歌舞伎の本質」「第二編 戯曲の基点」「第三編 観衆の問題」「第四編 演劇政策の諸問題」「第五編 演劇に於ける言葉と音楽」。付録に「著作目録」が掲載されている。

### 『歌舞伎問答』

- ・刊記：昭和 12 年 5 月 27 日
- ・発行所：帝国教育会第七回世界教育会議日本事務局（『日本文化講座』第 2 輯）
- ・頁数：全 70 頁。
- ・序文：なし。署名は「日本大学教授 飯塚友一郎」である。
- ・内容：講演の記録であり、その構成は「第一講 総説」「第二講 劇場、舞台、観客に就て」「第三講 歌舞伎役者に就いて」「第四講 歌舞伎狂言とその作者」「第五講 歌舞伎の演出法」であり、自ら設定した全 30 の問に答える自問自答形式の講演であった。

同書凡例に講演会の内容と目的が記されている。「一、本叢書は第七回世界教育会議日本事務局が同会議のために接待の任に当らるゝ部員諸氏に対し開設したる日本文化講座の講演速記を基として編纂したものである。一、右の講座は来朝外人の質問に応へ、又各自に修養の機を与へる為に開設したもので、専ら外人接待に必要な日本文化知識供給を目標として施設されたものである。」つまり自問自答形式は、このような要望に応えるための形式であった。

### 『随筆 腰越帖』

- ・刊記：昭和 12 年 10 月 8 日
- ・発行所：書物展望社
- ・頁数：目次 6 頁、本文 301 頁、写真 8 点。付録 2 頁。
- ・序文：「はしがき」（「昭和十二年秋九月 灯火管制下のほの暗き燈の元にて 飯塚友一郎識」）

- ・ 内容：唯一の随筆である。本書の一節「松井須磨子の臨終」の取り上げられることが多いが、昭和初期の腰越、江ノ島、藤沢、大船などの風物が描かれており、演劇に関係する貴重な記述も多い。たとえば、多数の大衆演劇とくに「節劇」が訪れた「腰越館」や「江の島縁起ページント」の構成台本、舅坪内逍遙に関する記述、「役者の健康」「芝居見物心得」など現代では非常に貴重な見聞が記されている。既述のとおり付録に「著者略年譜」が掲載され、他書には見られない昭和12年までの事跡がわかる。

### 『国民演劇と農村演劇』

- ・ 刊記：昭和16年2月3日
- ・ 発行所：清水書房
- ・ 頁数：本文282頁。
- ・ 序文：「はしがき」（「昭和十六年一月廿五日 農村文化講習の旅に立つ日 鎌倉腰越の椿咲く山荘にて 飯塚友一郎」）
- ・ 内容：全六篇構成の講座体裁の著述である。「第一篇 演劇と国民生活」（全五講）「第二篇 転換期の劇壇」（全八講）「第三篇 国民演劇と祝祭劇」（全五講）「第四篇 政治と演劇」（全六講）「第五篇 教育と演劇」（全五講）「第六篇 農村演劇の発足」（全八講）という内容である。はしがきに記された「この時局下に、演劇の行くてには、国民演劇と農村演劇という二つの目標があります。それも、つまりは一つなのです。」という時局認識、そして「各国の演劇政策にしばしば言い及びながら、本書にはそれらの委細をわざと割愛しました。それは別に一書にまとめるつもりだからです。」という言葉の裏に、日米開戦直前の苦渋に満ち溢れた重い意味を受け止めることができる。

### 『歌舞伎入門』

- ・ 刊記：昭和17年6月30日
- ・ 発行所：朝日新聞社（朝日新選書5）
- ・ 頁数：目次8頁、本文225頁、挿絵なし。
- ・ 序文：「はしがき」（「昭和十七年一月 鎌倉腰越の山荘にて 飯塚友一郎」）
- ・ 内容：全6講で構成された歌舞伎入門講座。

### 「演劇と教育」

- ・ 刊記：昭和17年11月20日
- ・ 発行所：河出書房（『演劇論』全5巻のうち第4巻『演劇と文化』所収）
- ・ 頁数：pp.97-136
- ・ 序文：なし。
- ・ 内容：全13項の短い著述である。その内容は「一 問題の所在」「二 歴史と原理と政策と」「三 演劇文化の実体」「四 演劇の道徳性—プラトンのとアリストテレスの」

「五 演劇の不道德性—ヘプライズムとヘレニズム」「六 東洋の歌舞演劇観」「七 徳川時代の演劇政策」「八 芸道と人間錬成」「九 明治演劇と政教」「十 逍遙と演劇教育」「十一 公共劇の提唱—演劇と社会教育」「十二 児童教育と演劇」「十三 国民演劇と農村演劇」となっており、いわば飯塚友一郎の演劇に関する思いの集成、あるいは戦時下における苛立ちが感じられる。すでに日米開戦後の世相を反映しているのであろうか、「大東亜戦争をきつかけに、文化論として政治論として演劇—映画や放送によるのも含めて—がとみに人々の関心をあつめ、それと呼応して政府の演劇文化政策も、実地にその緒についてきた。何故に、これまで太平の逸楽視された演劇が、戦時下の前面に押し出されてきたのかといへば、すぐに見易い国民娯楽とか厚生運動とかいふ方面への演劇の協力が求められたからであつた。」(同書 p.99) という文章に触れた時、戦時下における飯塚友一郎の時局認識と、その時代を積極的に活用しようとする屈折した精神が理解できるであろう。いわば第三項までの記述全体が「問題の所在」について述べているのである。

#### 『芸能文化論』

- ・ 刊記：昭和 18 年 6 月 20 日
- ・ 発行所：鶴書房
- ・ 頁数：目次 7 頁、本文 314 頁、挿絵なし。
- ・ 序文：「はしがき」(「昭和十八年春彼岸 腰越の山荘にて 飯塚友一郎」)
- ・ 内容：戦時下の要請すなわち翼賛文化運動の一環として著者が語ってきた「私の芸能文化運動の体験中に醸し出された芸能文化論」である。構成は、「第一編 芸能文化序論」「第二編 戦時生活と芸能文化」「第三編 地方文化と芸能」「第四編 芸能文化の伝統」である。

#### 4. 第三段階 (1946 ~ 1974)

##### 『農村と演劇』

- ・ 刊記：昭和 21 年 12 月 25 日
- ・ 発行所：全国農業会家の光協会
- ・ 頁数：本文 188 頁。
- ・ 序文：「はしがき」(「昭和廿一年八月ひぐらし蟬なく 鎌倉腰越の松連山荘にて 飯塚友一郎」)
- ・ 内容：全 31 項目の農村演劇に関する指導書である。その項目は「一、雪国と地芝居」「二、御法度の村芝居」「三、都と田舎」「四、佐久高原の踊狂言」「五、峯の薬師をめぐる村々」「六、狂言村の血脈」「七、奉納芸能」「八、念仏狂言の講中」「九、神楽狂言の訪れ」「十、高室芝居」「十一、川棚芝居」「十二、信濃路の旅芝居」「一三、淡路、阿波の人形座」「十四、



肱川から俵津へ」「十五、林の吉田人形」「十六、村芝居から農村劇場へ」「十七、フランス革命と民衆劇場」「十八、ロシヤの農奴劇場から演劇革命へ」「十九、演劇の解放と農村演劇」「二十、コルホーズ劇場と移動劇場」「廿一、自由劇場から郷土劇場へ」「廿二、アメリカの農村小劇場」「廿三、ラリモアの農村小劇場」「廿四、ドイツ山村の受難劇と風土劇場」「廿五、農村問題と民衆芸術」「廿六、郷土文芸と農民劇場」「廿七、宮沢賢治と松田基次郎」「廿八、産業組合と農村厚生演劇」「廿九、素人演劇運動と移動演劇」「三十、終戦後の解放された農村演劇」「卅一、国土計画と郷土劇場」である。これらの項目内容と、はしがきに記された「実をいふと、私は今これまでの政治的な指導理念は一応御破算にして、農村演劇を芸術として開放したい」という言葉は、制限の多かった戦時中も執筆活動が続けた演劇研究者の再出発の言葉として受け止めるべきであろう。

#### 『社会会改革と演劇：演劇民主化の方向』

- ・ 刊記：昭和 21 年
- ・ 発行所：社会教育協会
- ・ 頁数：本文 32 頁。

#### 脚本「真夏の月」

- ・ 刊記：昭和 22 年
- ・ 発行所：全国農業会家の光協会（家の光文庫 2 脚本新集第 1 集）

#### 『演劇学序説—演劇学の発展と、その演劇学の構想への手引き—』

- ・ 刊記：昭和 23 年 6 月 15 日初版（上下 2 巻）。昭和 35 年 5 月 20 日再版（2 巻合本）。
- ・ 発行所：雄山閣
- ・ 頁数：上巻：目次 8 頁、本文 362 頁、挿絵なし。下巻：目次 8 頁、本文 404 頁、挿絵なし。
- ・ 序文：初版上巻：「はしがき」（「昭和廿二年秋十一月 落葉しきりなる腰越の山荘にて 飯塚友一郎」）。「再版の序」（「一九六〇年五月 飯塚友一郎」）。初版下巻：飯塚友一郎「はしがき」（「一九四九年一月 梅の花咲く山荘にて 飯塚友一郎」）。
- ・ 内容：初版はしがきに本書の成り立ちが記されている。「わが国の大学で、はじめて専門的な演劇教育が試みられたのは、日本大学芸術科であるが、そこで私は、学部演劇学専攻の学生、および専門部演劇科の学生のために、十年あまり「演劇学」の講座を受持った。講座目は「演劇学」となっているが、それはむしろ演劇教育の専門化から要請された名目であつて、きびしい意味の演劇学の体系が立てられていたわけではなかつた。その内容は、演劇概論であつたり、舞台芸術論ないしは演劇美学であつたり、或は演劇論史の演習であつたり、時としては演劇政策論などにも及んだことがあつた。」。そして、「この書は、むしろ私自身のための演劇学の構想への手引きである。（中略）何よりも先人の演劇観ないし演劇論に、すなおに耳を傾けたいと思う。演劇史の一面を反射すると

ころの演劇論、その歴史的展開から、演劇学の対象と方法との示唆を求めたいと思う。」として本書は編まれているのである。

つまり本書は、『歌舞伎狂言細見』ないしは『歌舞伎細見』で試みた歌舞伎の本質を追究するための方法を、演劇という更に大きな対象に向かって大幅に拡大し、演劇観と演劇論を通して演劇の本質を追究した著作ということができるであろう。

上巻は、「一 演劇論の歴史と科学」から始まる全 38 項から成り、それぞれの細目を通して西洋演劇の演劇観・演劇論が纏められている。下巻は、「三九 東洋の演劇観」から始まる全 38 項から成り、それぞれの細目を通して東洋演劇の演劇観・演劇論が纏められており、最後の「七六 演劇学の構想体系」で学問としての体系が整理されている。

「アメリカ演劇におけるアマチュアリズムの発展 ―わが素人演劇の方向への示唆を含んで―  
A Development of Amateurism in American Theatre -Implying a Suggestion to the Line of our Amateur Plays-」

- ・ 刊記：昭和 25 年 12 月 25 日
- ・ 発行所：中央公論社（日本演劇学会編『アメリカ演劇の研究 ―附 昭和 26 年版演劇年鑑―演劇学会誌 I』
- ・ 頁数：pp.7-75
- ・ 序文：日本演劇学会編纂委員 代表 河竹繁俊「はしがき」（「一九五〇年十二月」）
- ・ 内容：前年秋に結成された日本演劇学会の学会誌創刊号に掲載された巻頭論文であり、演劇文化の伝統が浅いアメリカ演劇をどのように研究すべきかについて多角的に論じたものである。
- ・ 付記：同書所収の「演劇学会日録」に、日本演劇学会創設時の発起人会、創立総会、理事会、研究会の記録が残されており、飯塚友一郎は 14 名の発起人の一人として、また、「演劇学会役員及名誉会員」に 11 名の理事の一人として記録されている。因みに「演劇研究家人名録」には、（氏名）飯塚友一郎 ○（生年月日）明治二十七年十一月、○（出身地）東京、○（現住所）鎌倉市津一三二（電話片瀬三一）、○（所属団体または現職）ナシ、○（経歴）東大法学部卒、弁護士、昭和七年より十九年まで、日大芸術科教授、○（専攻分野）演劇史、演劇学、○（発表論文及び著述）歌舞伎再見、歌舞伎概論、農村と演劇、演劇学序説、と記されている。

『演劇入門』

- ・ 刊記：昭和 26 年 8 月 30 日
- ・ 発行所：旺文社
- ・ 頁数：目次 3 頁、本文 259 頁、索引 5 頁。
- ・ 序文：「序」（「一九五一年夏 腰越の松連山荘にて 著者」）

- ・ 内容：全3編の入門書で、「第一編 演劇と人生」「第二編 演劇界の展望」「第三編 演劇の運営」という構成になっている。付録として「演劇の参考書について」として演劇研究の方法が記されている。
- ・ 付記：本書目次の裏面に「筆者紹介 明治二十七年東京生まれ東大法学部卒業の後、弁護士を開業。その後専ら演劇研究に専念され、昭和七年より同二十年まで日大芸術科の教授として「演劇」の講座を担当された。現在は東京文科大学の教授であり、日本演劇学会の理事をされている。主なる著書には「歌舞伎概論」「新劇と旧劇」「農村と演劇」「演劇学序説」（二巻）「世界演劇史」（翻訳六巻）などその他多くの著書がある。現住所 鎌倉市津一三二番地」と記されている。なお、東京文科大学は、二松学舎大学のこの時期だけの学校名である。

#### 「歌舞伎史の新課題としての『若嶋座一巻』 A Chronicle of “wakashimaza” as a Subject in Kabuki History」

- ・ 刊記：昭和 27 年 10 月 15 日
- ・ 発行所：中央公論社（日本演劇学会編『歌舞伎の新研究 一附 昭和二十八年版演劇年鑑— 演劇学会誌Ⅲ』）
- ・ 頁数：pp.121~203
- ・ 序文：日本演劇学会会長 河竹繁俊「はしがき」（「昭和二十七年九月二十日」）
- ・ 内容：飯塚友一郎の著作としては珍しい原本の全文翻刻を基にした地方劇場の制度に関する研究である。原本筆写は「木村彦三郎君」<sup>⑨</sup>であったという。
- ・ 付記：同書所収の「演劇学会記録」に、昭和二十六年十二月二日、早稲田大法文系大学院講堂で研究発表会が開催され、「7、劇場制度の研究について 成城学園理事 飯塚友一郎」。昭和二十七年一月二十六日、芸術諸学会議が発会となり、日本演劇学会から評議員として「会長河竹繁俊、副会長守随憲治、理事飯塚友一郎」が就任した。同年五月十日、東京大学二十四番教室で昭和二十七年度春季研究発表会が開催され、「3、演劇学の課題と演劇教育の課程について 成城学園理事 飯塚友一郎」。

#### 「近世演劇論史」

- ・ 刊記：昭和 34 年 3 月 10 日
- ・ 発行所：岩波書店（岩波講座『日本文学史』9 近世）
- ・ 頁数：本文 48 頁。
- ・ 序文：「序説」
- ・ 内容：「近世における演劇論史」として「一 序説」「二 仏教流の歌舞演劇論」「三 儒教流の歌舞演劇論」「四 白石・鳩巣・徂徠らの演劇論」「五 国学者流の演劇論」「六 勧善懲悪論」「七 主体的な演劇論の展開」「結び」という構成になっている。岩波書店からの依頼原稿であるが、「近世演劇についての論史ではなく、近世における演劇論

史であり、またそうあるべきである。」という飯塚友一郎の拘りが記されている。

『増訂 演劇学序説 ―演劇論の発展と、その演劇学の構想への導き―』

- ・ 刊記：増訂〈上〉：昭和49年2月25日。増訂〈下〉：昭和49年3月15日。
- ・ 発行所：雄山閣
- ・ 頁数：増訂〈上〉：前半増補部分33頁。目次8頁、本文362頁、挿絵なし。前半増補部分8頁。増訂〈下〉：目次8頁、本文404頁、挿絵なし。後半増補部分58頁。
- ・ 序文：増訂〈上〉：「はしがき ―増訂版発刊にあたって―」（「昭和四九年正月 著者」）。増訂〈下〉：飯塚友一郎「まえがき ―増訂版発刊にあたって―」（「昭和四九年一月 著者識」）。
- ・ 内容：昭和23年刊の初版および昭和34年刊の再版（上下合本）の前半と後半に、「演劇学再考」、「世界大戦後の演劇論」、中国、インド、イスラム、「情報化社会と演劇学」を増補した著述であり、増補以外の部分の紙型はそのまま用いられている。  
〈下〉の「まえがき」に以下の言辞があり、齢80歳を迎えた著者の率直な研究者の姿を垣間見ることができる。

演劇論とは所詮、ただの演劇人の演劇評論ではなくて各時代の、各社会階層の世界観にもとづく歌舞演劇観ないし芸能観にほかならぬことを知った。増補版を出版するに当たって、少しく人間性の根本にふれた宗教思想や社会思想の文献を散見するにおよんで、これは容易ならぬ研究であることを知った。それは演劇現象の事実を記述するよりも、はるかに深刻微妙な人間の心情の動きを捕らえなければならぬ困難な課題である。

まさに、演劇を広く、深く追究し続けた研究者だけが到達できる、閑かな境地である。

- ・ 付記：巻末に「著者略歴 飯塚友一郎(いづかともいちろう) 明治27年11月11日生。東京。大正8年、東京帝国大学法学部卒。文学博士。二松学舎大学教授。日本大学芸術学部講師。日本演劇学会理事。日本演劇協会・日本劇場技術協会各顧問。国立劇場評議員・専門委員。主著『歌舞伎細見』『歌舞伎概論』『世界演劇史6巻訳』。住所 鎌倉市腰越2-23」とある。

## 5. 研究成果とその評価

上梓された著書の具体的な情報を基に飯塚友一郎の人生を第一段階（1919～1934）、第二段階（1935～1945）、第三段階（1946～1974）の3期に分けて辿った。

歌舞伎の本質を探るための方法として、ほとんどすべての歌舞伎演目に関して、典拠、由来、展開、参考書を網羅した処女作『歌舞伎狂言細見』とその増補改訂版である『歌舞

伎細見』を著し、そういった「各論」と対をなす『歌舞伎概論』をもって、歌舞伎に対する正しい認識に至った。これが飯塚友一郎 34 歳までの学究としての第一段階である。

しかしこのような研究は、一方で、演劇研究の「前提」もしくは過程に過ぎず、さらなる目標は「演劇学の樹立」であった。

自ら命名した「室内劇」などの素人演劇を研究対象とする研究は、農村演劇、学校演劇という展開をし、『世界演劇史』の訳業に至った。これは、つまり、演劇研究のもう一つの「前提」である「演劇観」と「演劇論」を世界規模で把握する過程である。これが学究としての第二段階であり、40 歳以前の到達点である。

戦時下の特殊な時代を経た後、ようやく『演劇学序説』の上梓をみたが、これも副題に示されているとおり「演劇学の構想への手引き」という演劇学樹立のための一過程であった。以降の四半世紀の間、飯塚友一郎の新著上梓は数多くはない。しかし、最晩年の『増補 演劇学序説』には、「情報化社会と演劇学」が増補されており、常に現実の世の中に対する目配りを欠かさなかった点を評価する必要があるだろう。まだインターネットが一般化する前の示唆に満ちた指摘である。また、同書に増補された「イスラム世界の芸能観」なども貴重な著述である。

増補版のまえがきに「以上、これまた世界の演劇論の委曲をつくせなかったことのアポロジイとして。」と詫言を記したが、飯塚友一郎の残した演劇学の恩恵に浴する後学は少なくない。

戦後の日本演劇学会などで飯塚友一郎に接していた河竹登志夫（1924～2013）の「幅の広い演劇研究者で啓蒙的指導者でもある飯塚友一郎」<sup>22</sup> という的確な評価があり、その「啓蒙的指導者」の実例は次のとおりであった。「私の記憶に強く残るのは、例の飯塚博士のきびしさだ。（中略）「そんなことは、論じつくされてるじゃありませんか。しっかりしてもらわなくちゃ困りますねえ。」（中略）飯塚博士の出席のときは殊更に学会には緊張感が漲った。が、若い研究者には敬遠されても、こうしたきびしいお目付役があったことが、当時の学会にとって幸せだったと、今はある懐かしさとともに思い出される。」<sup>23</sup>

## あとがき

飯塚友一郎は、最晩年に近い昭和 51 年（1976）82 歳の頃、日本大学大学院芸術学研究科で修士論文の指導をしていただいた恩師<sup>24</sup>であり、その恩師の学究人生を総括することは僭越の謗りを避けられない。しかし、恩師の伝記が存在しない現在、その膨大な著作を整理したに過ぎない本稿も、二松学舎大学などの教え子諸彦の、あるいは未来の演劇研究者の追究に際して少しは役立つこともあらうと考えている。



注

- ① 『随筆 腰越帖』 pp.225～229「松井須磨子の臨終」(昭和十二年一月)
- ② 成城学校は、1917年4月4日、新校長澤柳政太郎(1865～1927)が構内に私立・成城小学校を創設。1922年4月、5年制の成城第二中学校新設を経て、1925年関東大震災の翌年、世田谷の砧村に移転、という経緯で現在の成城学園、さらには町田の玉川学園に繋がっている。『成城学園八十年』成城学園1998。
- ③ 日本演劇学会編『歌舞伎の新研究』中央公論社1952に「成城学園理事 飯塚友一郎」という記述がある。また、小原國芳最晩年(逝去半年前)の「身辺雑記」昭和52年5月に「成城学校の理事」とある。牛込時代からの理事であったのか、世田谷時代からであったかは不明。
- ④ 『父 逍遙の背中』 pp.214-222
- ⑤ 若松町の新居は、『父 逍遙の背中』 p.233に「飯塚家の持ち家のうちの一軒で、若松町にございました。もとはたぶん将校の家だったらしく、二階建ての別棟や、馬小屋、かいば小屋などがならんでおりました。また、本棟の玄関わきにある書生部屋などは一〇畳もの広さがあり、床の間までついていました。あるいはおつきの軍曹の部屋だったかもしれません。」という豪邸であった。
- ⑥ 河竹登志夫によれば「くにさんの孫に当るみどりさんのご主人は、現ボン大学日本学研究所の主任教授ペーター・パンツァー博士」である(『父 逍遙の背中』 pp.299-300)。このみどりさんが、牛込の成城学校から玉川学園に勤続した玉川大学文学部教育学科初代主任田中末広(1895～1959)のご子孫であるとするならば、ここにも飯塚家との姻戚関係がある。
- ⑦ 平成26年14日、鎌倉商工会議所「第7回 鎌倉観光文化検定試験」の採点方針・見解ついて参照。
- ⑧ 詳しい略歴は不明だが、文面から察するに飯塚友一郎の高一・帝大の学友である。
- ⑨ 国立劇場芸能調査室編『狂言作者資料集(一)』国立劇場調査養成部芸能調査室1974所収。
- ⑩ 『演劇研究の方法』 p.12
- ⑪ 1895～1988。帝国ホテルのフランク・ロイドライト建築事務所(インテリア部門)、後に川奈ホテル勤務の舞台美術家。平成5年10月5日～11月26日、国立劇場資料展示室において「繁岡鑒一舞台美術展」が開催された。
- ⑫ 『演劇研究の方法』 p.333
- ⑬ 『父 逍遙の背中』 p.233
- ⑭ 「家庭劇をなさる時も、よく招いてくださいました。」。家庭劇は室内劇のことである。小原國芳「身辺雑記」昭和52年5月9日。この年の12月13日小原國芳逝去。
- ⑮ 小原國芳『学校劇論』 p.7
- ⑯ 河竹登志夫「逍遙とくにさんと河竹家」飯塚くに『父 逍遙の背中』文庫版 p.299
- ⑰ 坪内逍遙が1904年に著したもので、国劇を文明列国に比肩できるものとするための演劇論。従来の長唄などの邦楽はもちろん、洋楽なども加えて新しい楽劇を作るべきであるとした。その実例として「新曲浦島」を書き下ろした。新舞踊劇運動の端緒をひらいた先駆的著述といわれている。
- ⑱ 詳細は不明だが、「梨園の曙 一名西洋演劇脚本」を訳出した日本の実業家で茶人の高橋箒庵(1861～1937)であろうか。
- ⑲ 河竹登志夫「回歸する演劇学と演劇学会—草創期をめぐる私的回想—」 p.9には「その方法は六法全書を玉条とする法律学者らしく、演目、演出、制作など各面につき細密に分類し体系化することに特徴があった。」という指摘がある。
- ⑳ 飯塚友一郎「窮すれば通ず」『松原寛』 p.342
- ㉑ おそらく、鎌倉の郷土史家であった木村彦三郎(1906～1993?)のことであろう。飯塚友一郎とは昭和15年の「鎌倉文化協会」創設、さらにその発展として昭和21年の「鎌倉アカデミー」創設に尽力した同志であったという。("Report from Kamakura" "サンデー随筆" "鎌倉を愛し清貧を貫いた郷土史家＝木村彦三郎" <http://www2s.biglobe.ne.jp/~matu-emk/Kimura.html>)



2018.09.14. 閲覧)

- ② 河竹登志夫『演劇概論』p.34
- ③ 河竹登志夫「回帰する演劇学と演劇学会—草創期をめぐる私的回想—」『演劇学論集 日本演劇学会紀要』50号 p.10
- ④ 恩師の論文指導は、基本的には日本大学芸術学部江古田校舎の講師室で昼食時に行われた。恩師の小さな弁当にはいつも欠かさず葡萄が添えられていた。休暇中は腰越の御宅に呼ばれた。江ノ電の腰越で下車して、おそらくこの辺りだろうかと植木の手入れをされていた方に道を尋ねると、その方が恩師だった。景色が素晴らしい階上の居間に通された。部屋の一角にはバーがあった。くに夫人に「おい、あれをもってこい」という、すると夫人は「いいんですか、若い方に」「大丈夫だ」。そして運ばれてきたのがビールとウィスキーのジョニ黒で、それを半々にグラスに注ぎ、「まず飲め」という。82歳の恩師はすでに2杯目を注いでいた。ボイラー・メーカー（爆弾酒）という飲み方らしい。夕方飲んで早い時間に就寝し、未明に起床して勉強するのだという。論文に関する重要な指摘などのご指導を仰いだが、どのように帰宅したのか記憶がない。なお、筆者の母校である玉川学園と日本大学芸術学部は、その創立者小原國芳と松原寛が京都帝国大学哲学科の同級生かつ親友であり、そしてお二人は共に飯塚友一郎と深いつながりのある人物である。

参考文献（本文中に記した飯塚友一郎の著作を除く）

- 小原國芳『学校劇論』イデア書房 1923
- 松原寛『芸術の門』大阪屋号書店 1924
- 中村星湖『農民演劇入門』春陽堂 1927
- 松原寛（伝）刊行委員会『松原寛』日本大学芸術学部 1972
- 国立劇場芸能調査室編『狂言作者資料集（一）』国立劇場調査養成部芸能調査室 1974
- 河竹登志夫『演劇概論』東京大学出版会 1978
- 飯塚くに著・小西聖一編『父 逍遙の背中』中央公論社（文庫版）1997
- 『成城学園八十年』成城学園 1998
- 河竹登志夫「回帰する演劇学と演劇学会—草創期をめぐる私的回想—」。

日本演劇学会編『演劇学論集 日本演劇学会紀要』50号。日本演劇学会 2010年5月